

第 86 回 日本細菌学会総会 ワークショップ企画の一般公募について

第 86 回日本細菌学会のワークショップの企画提案を、以下の要領で公募いたします。

一般公募企画の種類

ワークショップ：1 テーマ 2 時間の企画を 3 テーマ採択いたします。

いただいた企画は、総会長、総会プログラム委員会、学会シンポジウム企画調整委員会で審議調整したうえで採否を決定し、提案者にお知らせいたします。採択された企画内容の構成は原則としてコンビナー（提案者）にお任せいたしますが、調整が必要な場合は総会長、総会プログラム委員、シンポジウム企画調整委員のいずれかからご連絡いたします。また、経費の都合上、非会員演者の交通費のサポートは 1 名までと致しますのでよろしくお願ひいたします。（総会長、シンポジウム企画調整委員会で既に決定した企画シンポジウム・ワークショップ一覧は資料 1 をご参照下さい。資料 1 の企画と重複しないような企画案をお願いいたします）。

応募方法

下記事項をご記入のうえ、第 86 回日本細菌学会総会事務局まで E-mail (saikin86@aeplan.co.jp) でご提案ください。

- 1) ワークショップ（一般公募型・依頼演題型・混合型の区別）
- 2) テーマタイトルと研究領域区分・キーワード（資料 2 参照のこと）
- 3) コンビナーの氏名・学会員番号・所属・連絡先
- 4) 概要（400 字以内）
- 5) 想定演者（案）の氏名・所属（一般公募型は不要）
- 6) 想定聴衆数

提案締切 9 月 7 日（金） 24 時まで

問い合わせ先

シンポジウム企画調整委員長

山崎伸二

〒598-8531 大阪府泉佐野市りんくう往来北 1-58

大阪府立大学大学院生命環境科学研究科感染症制御学領域

E-mail: shinji@vet.osakafu-u.ac.jp

[資料1] 総会企画シンポジウムおよびワークショップ

国際シンポジウム

IS1 タイトル	RNA World of Pathogenic Bacteria		概要
コンピーナー	Akio Abe (Kitasato Univ. Japan)	タイトル	Bacteria possess various strategies of RNA-mediated gene regulation during their transition from a planktonic phase to a virulent phase. Regulatory RNAs include mRNA leaders that control gene expression in cis or in trans, small non-coding RNAs (sRNAs) that interact with mRNAs of regulatory genes or bind to protein targets. Furthermore, the RNA binding protein Hfq is involved in the function and/or stability of sRNAs. The aim of this symposium is to outline the recent discovery of the RNA-mediated bacterial gene regulatory system in response to environmental signals.
スピーカー	1. Eduardo Groisman (Yale Univ., USA)	未定	
	2. Pascale Cossart (Institute Pasteur, France)	未定	
	3. Jörg Vogel (Univ. Wurzburg, Germany)	未定	
	4. Hiroji Aiba (Suzuka Univ. Medical Sciences, Japan)	未定	
IS2 タイトル	Bacterial Nanomachines: substrate targeting and translocation		概要
コンピーナー	Ikuro Kawagishi (Hosei Univ., Japan) Walid Houry (Toronto Univ., Canada)	タイトル	Specific molecular targeting and translocation are of vital importance for virtually any function of biological molecules. A variety of supramolecular nanomachines are known in bacteria to function as a targeting and translocation system. In this symposium, we will focus on well-defined prokaryotic nanomachines with the emphasis on specialized compartments they provide for facilitating reactions that occur therein. They include (i) proteolytic nanomachines, i.e. eubacterial AAA+ (ATPases associated with diverse cellular activities) barrel-shaped proteases, mycobacterial Pup (prokaryotic ubiquitin-like protein)-proteasome and archaeal SAMPs (small archaeal modifier protein)-proteasome, (ii) transporting nanomachines, i.e. multidrug efflux systems, and (iii) signal transducing nanomachine/sensors, i.e. chemoreceptor-kinase clusters.
スピーカー	1. Walid Houry (Toronto Univ., Canada)	未定	
	2. Julie A. Muupin-Furlow (Univ. Florida, USA)	未定	
	3. Eilika Weber-Ban (ETH Zurich, Switzerland)	未定	
	4. Satoshi Murakami (Tokyo Institute of Technology, Japan)	未定	
	5. Ikuro Kawagishi (Hosei Univ., Japan)	未定	
IS3 タイトル	Infection and Host Response		概要
コンピーナー	Tomoko Kubori (Osaka Univ.)	タイトル	Analysis of interactions between bacterial pathogens and their eukaryotic hosts is a central issue for researchers studying the mechanisms of microbial pathogenesis. The constant battle between host and pathogen is finely balanced, and breaking the balance can cause serious diseases. This session will focus on various aspects of bacterial pathogenesis, including bacterial systems essential for establishment of infection, mechanisms to cause diseases, and host cellular responses. Molecular strategies both of pathogens and host organisms will be discussed.
スピーカー	1. David Holden (Imperial College London, UK)	未定	
	2. Kelly S. Doran (San Diego State Univ., USA)	未定	
	3. Yunn Hwen Gan (National Univ. Singapore, Singapore)	未定	
	4. Shigeo Koyasu (Keio Univ., Japan)	未定	
	5. Andree Hubber (Osaka Univ., Japan)	未定	
IS4 タイトル	New Trends in Anti-infection Strategies		概要
コンピーナー	Kazuhiro Tateda (Toho Univ., Japan)	タイトル	Antibiotic resistance is one of the greatest challenges carried over into the 21st century. However, the increasing understanding of bacterial pathogenesis has revealed many potential strategies to combat bacteria-mediated diseases. Interference with bacterial virulence and/or intercellular communication is an especially compelling approach, as it will exert less biological pressure to develop resistance than traditional antibiotics, which attempt to eradicate or inhibit bacterial growth. In this symposium, we will discuss promising anti-virulence strategies and compounds for the future treatment of bacterial infection.
スピーカー	1. Michael Givskov (Univ. Copenhagen, Denmark)	未定	
	2. Pradeep Singh (Washington Univ., USA)	未定	
	3. Yoshichika Arakawa (Nagoya Univ., Japan)	未定	
	4. Akio Abe (Kitasato Univ., Japan)	未定	
	5. Kiyotaka Nishikawa (Doshisha Univ., Japan)	未定	

シンポジウム

S1 タイトル	始まった市中型感染症原因菌の逆襲		概要
コンピナー	後藤直正*(京都薬大・薬・微生物感染制御学) 生方公子(北里大・北里生命科学研)	タイトル	MRSAやMDRPIに代表される多剤耐性菌によるアウトブレイクから院内感染症に対する注目度は高い。いっぽう、市中でも耐性菌が円滑な抗菌化学療法を困難にしているにも関わらず、認識は高くない。感染制御は、医療関連施設院を含めた社会すべての課題である。このような意図から、淋菌、結核菌やマイコプラズマを含むグラム陽性・陰性菌、さらには真菌など、市中感染症の現状とその起因菌の耐性機構をクローズアップした。
スピーカー	1 生方 公子(北里大・北里生命科学研)	グラム陽性球菌とマイコプラズマにおける耐性化とそのメカニズム	
	2 石井 良和(東邦大・医・微生物感染症学)	市中に広がる多剤耐性グラム陰性菌の現状とその原因	
	3 大西 真(感染研・細菌第1部)	密かに進行する淋菌のβラクタム剤耐性	
	4 御手洗 聡(結核研究所・抗酸菌レファレンス部)	多剤耐性結核菌の落とし穴	
	5 田辺 公一(感染研・生物活性物質部)	抗真菌薬耐性機構と対策	
S2 タイトル	忍び寄る人獣共通病原体		概要
コンピナー	関崎 勉*(東大院・農学生命科学・食の安全研究センター) 度会雅久(山口大院・連合獣医学・病態予防獣医学)	タイトル	社会構造の変化、人や物流、あるいは食のグローバル化によって、人と動物の間で伝播する感染症や病原体によって次々と発生する新興・再興感染症に常に社会の注目が集まる時代になっている。そこで、本シンポジウムでは、人獣共通病原体の中でも上記の視点から特に注目すべきものに焦点を絞り、それらに対して我々の防備は万全か？研究の進歩は人類を救うことができるか？について気鋭の研究者による最新の研究成果を元に議論する。
スピーカー	1 福士秀人(岐阜大・応用生物科学部・獣医微生物)	オウム病クラミジアとその感染症における現状と課題	
	2 齋藤光正(九州大院・医学研究院・細菌学分野)	レプトスピラ感染症 ～ワイル病病原体発見から百年～	
	3 棚林 清(感染研・獣医科学部)	野兎病の発生状況と分子疫学	
	4 度会雅久(山口大院・連合獣医学・病態予防獣医学)	ブルセラ感染と宿主応答	
	5 丹羽光一(東京農大院・生物産業学・食品科学)	ヨロイをまとった世界最強の神経毒・ボツリヌス毒素	
	6 奥谷晶子(感染研・獣医科学部)	アジアにおける炭疽の発生状況と遺伝学的解析について	
S3 タイトル	バイオフィルム制御に向けての挑戦的アプローチ		概要
コンピナー	木村 聡一郎*(東邦大・医・微生物感染症学) 狩山 玲子(岡山大院・医歯薬学総合研究科・泌尿器病態学)	タイトル	バイオフィルム(BF)は細胞外マトリックスを伴った微生物群集であり、化学的・物理学的な外的刺激から逃れる手段として形成される。BF内では、本来単細胞である細菌が多細胞のように振る舞うことから、その制御機構に関する基礎的研究を推進することが重要となる。また臨床で問題となる難治性のBF感染症やその治療、さらには産業におけるBFの利用など、その研究範囲は多岐にわたる。本シンポジウムでは、医学・歯学領域の研究者だけでなく環境科学領域の研究者も交えて、BFに関する幅広い情報を提供し、BF研究の今後の展開を含めた討論の場としたい。
スピーカー	1. 木村聡一郎(東邦大・医・微生物感染症学)	緑膿菌のバイオフィルム形成とその制御機構	
	2. 米澤英雄(杏林大・医・感染症学)	Helicobacter pyloriのバイオフィルム形成とその制御に向けて	
	3. 泉福英信(感染研・細菌第一部・口腔細菌感染症)	歯学領域におけるバイオフィルムとその制御法の開発	
	4. 野村暢彦(筑波大・生命環境系・微生物生理化学)	環境科学領域におけるバイオフィルムとその制御法の開発	
	5. 狩山玲子(岡山大院・医歯薬学総合研究科・泌尿器病態学)	医学領域におけるバイオフィルムとその制御法の開発	
S4 タイトル	感染における宿主の炎症制御機構		概要
コンピナー	三宅 健介(東大・医科研・感染遺伝学) 長岡 功*(順天堂大・医・生化学生体防御学)	タイトル	感染症における炎症は様々な要因によって制御されている。本セッションにおいては、宿主側の要因に焦点を絞り、感染の際の炎症がいかに制御されているのかという点について考える。演者としては、マウスやヒトの研究に加えて、ショウジョウバエの実験系を用いた研究も紹介する。さまざまな宿主の観点から、炎症制御を考える点が、このセッションの大きな特徴である。
スピーカー	1 三宅 健介(東大・医科研・感染遺伝学)	Toll-like receptorの局在と活性の相関	
	2 倉田祥一郎(東北大院・薬学研究科)	ショウジョウバエの感染防御を担う新しい受容体	
	3 鈴木敏彦(琉球大院・医学研究科・細菌学)	細菌感染とNod-like receptor	
	4 川畑俊一郎(九大・院・理学研究院)	腸内細菌により誘導されるIMD経路を介したシグナル伝達制御	
	5 筒井ひろ子(兵庫医科大・医・病原微生物学)	Helicobacter pylori慢性胃炎における胃上皮細胞の役割	
	6 鈴木香,長岡 功(順天堂大・医・生化学生体防御学)	生体防御ペプチドによるLPSシグナルの制御	
S5 タイトル	腸内・口腔・皮膚フローラ研究の新展開		概要
コンピナー	大澤 朗*(神戸大・農・資源生命科学) 梅崎良則(ヤクルト・中央研)	タイトル	人や動物の体表、口腔、腸管および生殖器粘膜には常在的に多種多様な微生物が微生物叢(フローラ)を形成し、宿主機能の恒常性維持に関与している。近年の研究では、これらのフローラが宿主の免疫や代謝機能だけでなく脳機能にまで影響を与えることが報告されている。本シンポジウムでは、生体の様々な部位で形成されるフローラの宿主との相互作用に焦点をあて、最新知見を紹介し今後の展開を議論する。
スピーカー	1. 大草 敏史(東京慈恵会医科大・医・消化器内科学)	腸内細菌叢の破たんと潰瘍性大腸炎	
	2. 藤澤倫彦(日本獣医生命科学大・応用生命科学)	腸内細菌叢の検索と構成菌	
	3. 落合 邦康(日本大学・歯・細菌学)	歯周病原菌代謝産物・酪酸の歯周組織に及ぼす影響と潜伏感染ウイルスの再活性化	
	4. 園山 慶(北大・農・生物機能化学)	腸内細菌叢とメタボリックシンドローム	
	5. 杉田 隆(明治薬大・薬・生命創薬科学)	ヒト皮膚常在微生物とその菌叢解析に基づく疾患制御	

ワークショップ

W1 タイトル	細菌間および細菌宿主間の相互作用	混合型	概要
コンピーナー	水之江 義充(東京慈恵医科大・医・細菌学)	タイトル	近年まで医学細菌学の研究は、病原細菌とその病原因子に焦点が絞られていたといっても過言ではない。しかし、近年のゲノム解析技術の進歩により、腸内フローラをはじめとする常在細菌の研究にも力が注がれるようになった。常在細菌が病原細菌の侵入を防いでいると言われていたが、その確たる証拠はなかった。今回のワークショップでは、細菌間干渉、宿主微生物相互作用などについて最新の研究を紹介する。
スピーカー	1 水之江義充(東京慈恵会医科大・医・細菌学)	細菌間干渉・細菌宿主相互作用:常在菌による黄色ブドウ球菌の排除等	
	2 大野博司(理化学研究所・免疫アレルギー科学総合研究センター)	宿主・常在菌・病原菌相互作用:ピフィズス菌と腸管出血性大腸菌O157の例	
	3 桑原知巳(香川大・医・分子微生物学)	腸管内における宿主微生物間相互作用に関わる分子の探索	
	4. 公募		
	5. 公募		
	6. 公募		
W2 タイトル	ワクチン研究の最前線	混合型	概要
コンピーナー	大西 真*(感染研・細菌第一部) 長谷川秀樹(感染研・感染病理部)	タイトル	国内においても新規ワクチンの導入が続き、改めて感染症制御におけるワクチンの重要性が再認識されてきた。薬剤耐性が進行していく中で、細菌感染症においても、さら新規のワクチン開発の要求が高まっていく可能性がある。ワクチンによる予防が可能となる対象疾患を広げるとともに、投与ルート、使用アジュバントに関する研究も重要となる。本ワークショップでは、これらの研究開発の一端を依頼演題として紹介していただくとともに、一般公募としてワクチン開発に関連する演題を採択したい。萌芽的な研究課題であっても、今後の展開について第一線でワクチン開発に挑む研究者とともに活発な討議が行われることを期待している。
スピーカー	1. 石井 健 (医薬基盤研・創薬基盤研究部)	アジュバント開発研究の最前線	
	2. 岡田直貴 (阪大院・薬学研究科・薬剤学分野)	経皮(貼る)ワクチン開発の最前線	
	3. 長谷川秀樹(感染研・感染病理部)	次世代ワクチンとしての経鼻インフルエンザワクチン	
	4. 川村尚久 (大阪労災病院・小児科)	ロタワクチンの臨床開発からその後	
	5. 公募		
	6. 公募		
W3 タイトル	細菌毒素とエフェクター	一般公募型	概要
コンピーナー	芦田 浩*(東大・医科研・細菌感染生物学) 八尋錦之助(千葉大・医・病原分子制御学)	タイトル	多くの病原細菌の細菌毒素やエフェクターは、特異的且つ巧妙に宿主の細胞機能を攪乱し、感染・病態形成機構に寄与している。これらの分子基盤を理解する上で、毒素やエフェクターの性状や分子機構の解析は不可欠である。本ワークショップは一般公募型とし、毒素、エフェクターの性状、分子機構の解析に関する最新の知見を紹介して頂き、基礎的研究から細菌感染症克服への応用研究まで幅広い意見交換の場を提供したい。
スピーカー	1. 公募		
	2. 公募		
	3. 公募		
	4. 公募		
	5. 公募		
	6. 公募		
W4 タイトル	カンピロバクター研究の最前線	依頼演題型	概要
コンピーナー	三澤尚明(宮崎大・農・獣医公衆衛生学) 山崎伸二*(大阪府大院・生命環境科学・感染症制御学)	タイトル	カンピロバクターによる食中毒は発生件数、患者数とも近年常に上位を占めている。感染源は、家畜特に、家禽であることから、カンピロバクター食中毒を防ぐ為には、農場レベル、食肉生産レベルでの汚染の制御が重要である。本ワークショップでは、カンピロバクター下痢症の臨床像、カンピロバクター食中毒の制御に向けた最新の研究成果について発表してもらおう。また、家畜由来のカンピロバクターの薬剤耐性動向についても紹介して頂く予定である。
スピーカー	1. 山崎伸二(大阪府大院・生命環境科学・感染症制御学)	カンピロバクターの迅速検査法:患者便と食肉検体への適用	
	2. 名木田 章(水島中央病院・小児科)	小児下痢症、特にカンピロバクター下痢症の特徴	
	3. 岡村雅史(北里大・獣医・人獣共通感染症学)	農場レベルでのカンピロバクター汚染とその制御	
	4. 岩田剛敏(動衛研・細菌・寄生虫研究領域)	細胞表面糖鎖の構造変化がカンピロバクター環境抵抗性に及ぼす影響	
	5. 三澤尚明(宮崎大・農・獣医公衆衛生)	カンピロバクターの鶏肉汚染のメカニズムと制御	
	6. 浅井鉄夫(動物医薬品検査所)	家畜由来カンピロバクターの最新の薬剤耐性動向	

W5 タイトル	公募		概要
コンピーナー	公募	タイトル	
スピーカー			
W6 タイトル	使ってみよう次世代シーケンサー		概要
コンピーナー	小椋義俊*(宮崎大・フロンティア科学実験総合センター) 黒田 誠(感染研・病原体ゲノム解析センター)	タイトル	現在、次世代シーケンサー(NGS)が急速に普及している。解読リード長の伸長、解読精度の向上、低コスト化が続く中、各社がベンチトップ型NGSを発売したことも大きく貢献している。世界中で様々な分野の研究にNGSが用いられており、細菌学分野においてもNGSを用いた大規模配列解析が次々とハイインパクトジャーナルに掲載されている。しかしながら、国内の細菌学分野に限っては、NGSの利用はまだ限定的である。本ワークショップでは、NGSの基本知識、NGSを用いた解析実例を講演頂き、本学会員へのNGS利用拡大に繋がればと考えている。
スピーカー	1. 豊田 敦(遺伝研・生命情報研究センター)	第二・第三世代の配列決定技術の現状	
	2. 伊藤武彦(東工大 生命理工)	次世代シーケンサからの新規ゲノム決定	
	3. 大島拓(奈良先端大・バイオ・細胞機能システム)	NGSによる転写解析を利用したゲノム情報の多元化	
	4. 石川淳(感染研・生物活性物質部)	de novo アセンブラーのパラメーター設定が左右するアセンブル結果	
	5. 黒田誠(感染研・病原体ゲノム解析研究センター)	メタゲノム解析に有用なソフトウェアの紹介	
	6. 公募		
	7. 公募		
W7 タイトル	公募		概要
コンピーナー	公募	タイトル	
スピーカー			
W8 タイトル	細菌構造研究の新展開:分泌装置, 細胞骨格, 運動装置, 細菌表層の構造体を中心に 共催:新学術領域研究「運動超分子マシナリーが織りなす調和と多様性(領域代表:宮田真人)		概要
コンピーナー	本間道夫*(名大・理・生命理学) 福森義宏(金沢大・理工研究域)	タイトル	細菌は、タンパク質分泌装置・オルガネラ・細胞骨格・運動装置・外膜等の特徴ある構造体をもつ。その構造体に関して、細菌であればこそ、機能や構造について詳細に研究が進められている。これらの細菌の特徴ある構造体に関する最新の研究成果および動向を報告する。今回は、べん毛特異的タイプIII輸送システム、べん毛の形成制御、Sec分泌制御、細菌表層の新構造、細菌細胞内のフィラメント構造、ペプチドグリカン構造について紹介してもらう。
スピーカー	1. 南野徹(阪大・生命機能)	べん毛III型特異的シャペロンの機能構造	
	2. 小嶋誠司(名大・理)	細菌べん毛の構築と機能を制御するしくみ	
	3. 森博幸(京大・ウイルス研)	タンパク質分泌促進因子SecDFの構造・機能・発現制御	
	4. 田岡東(金大・理工)	生きた細菌細胞表層のナノオーダー構造解析	
	5. David Popp(Insitute of Molecular and Cell Biology Singapore)	Structures, suprastructures and dynamics of bacterial filament systems	
	6. Tom Bernhardt(Harvard Medical School)	ペプチドグリカン合成装置	
W9 タイトル	めざせ!細菌学の星☆		概要
コンピーナー	小田真隆(徳島文理大・薬・微生物)	タイトル	本ワークショップでは、細菌学を基盤とし、様々な壁を乗り越えながら切磋琢磨している若手研究者の育成を目的とする。様々なバックグラウンドを持つ研究者と研究交流し、科学研究における自由な創造の場を作りたいと考える。本ワークショップでは、若手研究者のさらなる活躍を期待して口頭による意見交換に加えて、聴衆からのコメント(記述)などを回収し、発表者へフィードバックしたいと考える。
スピーカー	1. 小田真隆(徳島文理大・薬・微生物)	ワークショップの概要	
	2. 公募		
	3. 公募		
	4. 公募		
	5. 公募		
	6. 公募		
	7. 公募		
	8. 公募		
W10 タイトル	公募		概要
コンピーナー	公募	タイトル	
スピーカー			
W11 タイトル	腸管感染細菌の病原システム		概要
コンピーナー	伊豫田 淳*(感染研・細菌第一部) 戸邊 亨(阪大院・医・生体情報科学)	タイトル	腸管を感染のポータルサイトとしている病原性細菌は、それらが保有する多種多様な病原性因子(細胞接着因子, 細胞侵入性因子, 細胞内作用因子[毒素]等)の特異的な機能発現によって宿主への感染を成立させています。本ワークショップでは、腸管感染細菌が保有する様々な病原性因子について、その分子機能から感染成立における役割まで広く議論する場を提供したいと考えております。皆様からのご応募をお待ちしております。
スピーカー	1. 顔 宏哲(阪大院・医・感染防御学)	病原性大腸菌による宿主細胞の炎症応答調節機構	
	2. 小林 泰良(東大・医科研)	赤痢菌の上皮細胞内生存戦略としてのパイロトローシス抑制機構	
	3. 児玉 年央(阪大・微研)	腸炎ピリオの下痢誘導機構	
	4. 公募		
	5. 公募		
	6. 公募		

ミニワークショップ

MW1タイトル	細菌と酸素	依頼演題型	概要
コンピーナー	津田 雅孝(東北大院・生命科学)	タイトル	<p>酸素は、好気呼吸における最も効率的な最終電子受容体である一方で強力な細胞毒性をもたらす活性酸素種を生じさせるという点で、諸刃の剣といえる物質である。本ミニワークショップでは、細菌において酸素の有無によって顕在化する現象やそのメカニズム、そして、活性酸素等に対する防御機構などについて、最新の知見を紹介する</p>
スピーカー	1. 野村暢彦(筑波大院・生命環境)	好気および嫌気条件下における緑膿菌バイオフィルムの違い	
	2. 新井博之(東大院・農学生命)	緑膿菌における酸素応答と呼吸代謝制御	
	3. 津田雅孝(東北・院・生命科学)	グラム陰性細菌における鉄レギュロンと活性酸素との関係	
	4. 山本裕司(北里大・獣医)	連鎖球菌における鉄結合タンパク質を介した酸素耐性メカニズム	
MW2タイトル	事例に学ぶ細菌学	依頼演題型	概要
コンピーナー	飯島義雄(神戸市・環境研)	タイトル	<p>さまざまな食中毒・感染症事例は、研究の原点と言える。食中毒・感染症事例は、その対策を考えるだけでなく、それを引き起こした微生物の感染機構、病原性、耐性等の基礎研究や疫学的解析を進める上で非常に大切な情報源である。近年、国内で発生した食中毒・感染症事例の中で、特に興味深い事例を対象に、検査・解析等を担当された専門家に紹介していただく。</p>
スピーカー	1 五十君 静信(医薬品食品衛生研・食品衛生管理部)	あずきばっとうによるボツリヌス食中毒事例(仮)	
	2 磯部 順子(富山衛研・細菌学)	富山県における腸管出血性大腸菌O111事例(仮)	
	3 大西 貴弘(医薬品食品衛生研・衛生微生物部)	クドアを原因微生物とする新しい寄生虫性食中毒	

[資料 2] 研究領域区分

研究領域	キーワード
1 分類	a. 遺伝子・分子系統解析 b. 菌体成分・抗原性 c. 鑑別法 d. その他
2 生態	a. 生態 b. 細菌叢 c. 環境細菌 d. 生育環境・培養条件 e. その他
3 形態と菌体成分構造	a. 形態 b. タンパク質 c. 脂質・糖脂質 d. ペプチドグリカン e. 細胞骨格 f. その他
4 生理	a. 代謝・生合成 b. 運動 c. 菌体内情報伝達 d. 菌細胞間情報伝達 e. 分泌と輸送 f. 溶菌 g. 生理活性物質 h. その他
5 病原因子と病態	a. 接着因子・定着因子 b. 細菌毒素・エフェクター c. 抗原性物質 d. その他の病原因子 e. 細胞内侵入 f. 細胞内寄生 g. 感染モデル・病原性評価 h. 病原性変異体・病原遺伝子 i. その他
6 遺伝子	a. バイオインフォマティクス b. 遺伝子伝播 c. 遺伝子の構造と発現 d. 遺伝子機能 e. 遺伝子組み換え・解析技術 f. その他
7 抗菌性物質	a. 抗菌性物質 b. 薬剤耐性機序 c. 薬剤耐性遺伝子 d. その他
8 免疫・生体防御	a. 自然免疫 b. 適応免疫 c. 免疫回避・免疫傷害・共生 d. ワクチン e. その他
9 感染症	a. 臨床微生物の分離・性状 b. 検出・同定・診断の技術 c. 疫学・分子疫学 d. その他
10 真菌・放線菌	
11 その他	